

「近畿圏広域計画検討会議」 第2回幹事会 議事要旨

1．開催日時：平成 19 年 4 月 16 日（月） 13：00～17：00

2．場 所：第1別館3階 4号会議室

3．出席者：別紙参照

4．議事要旨

（１）「近畿圏の戦略（案）」について意見交換

○第1部：グループ討議（ブレインストーミング）

- ・参加メンバーを3班（10名程度）に分け、「暮らし・環境」をキーワードにブレインストーミングを実施。

○関西の個性

- ・近畿は各地域が固有の歴史・文化を持った多様性のあるモザイク状の構造をしている。モザイク状の構造を活かすなど、近畿としての持ち味を活かした地域づくりが必要。
- ・関西らしさとして、近所づきあいや地域地域のつながりを大切にする気風がある。
- ・歴史的には淀川水系が利用されてきたが、今では鉄道ネットワークや高速道路ネットワークが活用されている。鉄道ネットワークは市民の生活の支えにしてきたものであり、こうしたネットワークをサスティナブルなものにしていくことが大切。
- ・都市が地方の就業の場となるなど、都市の人が地方の人びとと地方の人が都市の人びとと交流していくモデルを目指す必要がある。近畿では都心も地方も住むことができる。
- ・棚田の景観や地方の文化などは、残していく必要がある。
- ・住みやすいまちとしては、最低限の働く場が必要であり、働きやすいまちとの両立が必要。外国人の方も含めて考えるべきである。

○地方の生活・保全

- ・団塊の世代が退職した後の暮らし方がテーマとなっているが、農業関係でいくと地域の農村部に入り、担い手になることが考えられる。60歳で退職しても10年は地域の担い手になれる。
- ・田舎暮らしは女性が大変なので女性には人気が低い。女性が困らない田舎暮らしがキーワード。友達や遊び場が田舎にないことも要因ではないか。
- ・高齢になったときに本当に田舎志向が強まるのかは疑問。完全に本拠地を移すというよりは、余暇を田舎で楽しむようなスタイルの方が多いのでは。
- ・地方の課題は、生活に文化を活かし、産業につなげていく仕組みの整備。地方の活性化の中で都市との交流がキーになる。
- ・ライフプランの中で、居住地の選択が可能になればいい。

- ・ 都市の便利さと、田舎の良さを体験できる地域を目指す。全国のマザーランドで全国から移住者を呼び込む。国土保全、環境保全のためにも重要である。
- ・ 移住してもらうためには、医療や女性の気持ちが重要。
- ・ 関西は田舎部分と都心部分の距離が非常に近い。両方を気軽に享受できる地理的条件が揃っている。
- ・ アクセスは鉄道と道路であるが、高齢になると車よりも鉄道の方が便利。
- ・ 近畿は、様々なニーズに応えることができる地域であり、地域のライフスタイルにあった魅力を探り、高めることが大切。
- ・ 歴史のある地域は、その歴史を活かした暮らし方を創る。
- ・ 限界集落の保全をどうするのか。国土を守るといった視点から機能を考えていく必要がある。

○環境

- ・ 近郊緑地保全は広域的に取り組んでいかなければならない。近畿は自然が少なくなっているように見えるが、都市の近くに身近な自然が多く残っている。これらをいろいろな形で活用していくことが大切。
- ・ 近畿では、市民の環境意識が高く、多くの環境施策に取り組んでいる。
- ・ 近畿は、公園の整備も少なく、屋上緑化や壁面緑化を推進していくことも考えられる。近畿は、大阪城や大川にはあるが、本町など、都市の真ん中に緑がなく、克服する必要がある。
- ・ ヒートアイランドを防ぐため、屋上緑化などいたるところで緑化が必要。
- ・ 近畿は、海、琵琶湖、河川等の地理的条件に恵まれている。水を活かした都市再生の事例が世界には多くある。水を打ち出すと近畿らしさが出せるかもしれない。
- ・ 東京湾と大阪湾を比べると、東京湾は干潟が多い。大阪湾でも干潟の回復の取り組みは行っている。海があっても人が近づけないと意味がない。堺より南の海で干潟の回復にがんばってもらう。
- ・ 食品系廃棄物のリサイクルは考えられる。近畿は人工林が多く、間伐材を利用した木質バイオエタノールで何かできるかもしれない。
- ・ 森林はCO₂の吸収源としての役割を持っている。近畿ではCO₂の排出と吸収の収支が合うのではないか。「地球に迷惑をかけない近畿(サステナブル近畿)」というのは打ち出せる。
- ・ 近畿は、リサイクル率は高い方である。近畿にはごみを集める業者も多い。但し、ごみの分別についてはいい加減である。
- ・ 自然と人間がともに輝ける圏域としての戦略を加えてほしい。特に琵琶湖から淀川の流域は多様な自然が豊富にある。
- ・ 環境と経済を両立していくしかけづくりがカギ。経済と環境、生活のしやすさの三つをバランスさせ、それを世界に発信していく。
- ・ このような環境を柱とした個性を、アジアとの関係における近畿の特徴として位置付けることができる。

○文化・景観

- ・ 近畿の都市はインフラの整備は進んでいるが、リノベーションが必要なプロセスになっていっている。文化・景観といった視点からインフラを今風に変え、世界に示していく時期にきている。
- ・ 近畿は多様であり、近畿らしさというイメージづくりは難しい。景観形成は地域、自治体の想像力が試される。
- ・ 多文化の共生、多様性のある文化の共生を踏まえた地域づくりが必要である。
- ・ 地域資源として差がつくのは景観であり、都市景観、自然景観などを上手く活用していくことが大切。景観と農業は密接な関係にある。にぎわう農業を目指しているが、実際に耕作されていないと良好な景観は形成されない。
- ・ 日本の都市はどこにいても同じ顔であり、自治体のイマジネーションが不足しているのではないかと。自治体としてやれることも増えている。ユニバーサルデザインに統一していく方法もある。徹底するということが大切であり、中途半端はよくない。

○人

- ・ 少子高齢化が進み、将来社会の担い手の問題が深刻になってきている。子どもにとって暮らしやすい像のイメージとは何かを検討する必要がある。
- ・ 閑空が24時間化すると問題になるのは女性の就業問題である。24時間化で、女性の生活のソフト問題（保育等）が課題になる。女性が働きやすい環境として最も大切なのは育児の問題である。
- ・ 結婚した後は、女性が居住地を決める。女性が住みたくなる地域を整備する必要がある。女性は治安、教育を重要視する。
- ・ 大学を出た後、いかに若者の流出を食い止めるかが問題。若者の定住のためには医療、出産、育児などが重要である。

○その他

- ・ バックアップ機能を考えるにあたり、民間企業を含めたバックアップ機能を考える必要がある。
- ・ 近年多くの分野でNPOが活躍。従来の公的サービスの民活の動きも発展。関西は市民力の素地がある。近畿の大商人、橋・堀等、自らまちづくりを主導してきた。関西はもともと「新たな公」の気質はある。

○第2部：全体討議

- ・ 「活力」、「暮らし・環境」のブレインストーミングを基に全体で意見交換を実施。主な意見は以下の通りである。
- ・ 世界における役割、近畿における役割を果たすという視点だけでなく、そこに出発点がなくても住みやすい近畿のためにできることという視点も必要と思う。もっとたくさんアイデアがあっても良いと思う。もう少し具体的な内容の方が良い。
- ・ どのようなことでも、何故このような形になったかを掘り下げて検討するべき。
- ・ 京阪神地域があって、消費財も増えていくので、その窓口が必要になる。アジアとの関係を考えても物流の効率化は必要。だからベイエリアの活用が考えられる。このようなストーリーが必要。バックアップ機能も、何故必要かといったストーリーが必要である。
- ・ 気になるのは一極集中で、今回の議論であまり深まっていない。もう少し具体的な議論をした方がいい。一極から二極へという方向を出した方がいい。双眼構造という表現もある。一極集中なのか、地方分散なのかという議論ははっきりすべきである。
- ・ 関東は同心円状だが、近畿は多様な都市がモザイク状に立地している地域である。近畿は環境をテーマにして、共存共栄する環境のモデル地域として発信することはできるのではないか。京都議定書以外にも、湖沼会議やエコドライブ運動など、近畿は環境に対し情報発信をしている。高速道路は全てつなく、公共交通機関を増やす、森を増やすなど、これから先のことを打ち出す方がより重要である。
- ・ アジアとの交流において、近畿圏には優位性がある。交流が発展すると経済効果も見込まれる。関西とアジアとの関係で、交流の拠点ということを戦略として打ち出していくことが重要と思う。アジアのゲートウェイも交通の玄関口というだけでなく、もう少し掘り下げるべきである。交流は、アジアから近畿に来るのも、近畿からアジアに行くのも両方含むと思う。アジアに限定すると九州など他地域も使っているのでインパクトが小さい。アジア・太平洋などに広げられないか。

以上